

<サロン 9 条> 第 340 回例会 (2019. 10. 8)

テーマ : 「朗読劇『茶色の朝』の上演にあたって」

話題提供 : 田島(たしま)千穂さん (劇団風の子中部事務局) 参加者 15 名

今回は、「未来を創るのは子ども一本当の自由な社会、真の民主主義の時代を子どもとともに創っていく」ことを願って創立され、来年で 70 周年を迎える「劇団風の子(中部)」事務局の田島千穂さんをお招きして、11 月 3 日に開催される「2019 ぎふ平和のつどい」での朗読劇『茶色の朝』上演にあたっての思いを縦横に語っていただきました。

最初に田島さんは、70 年前、東京での「劇団風の子」創立時の思いに触れられました。当時の設立者たちが戦中の軍国少年であったものの、敗戦により世の中の価値観が 180 度変わり、騙されたような気持ちと自身が騙された責任を感じたことから、「これからの子どもたちには、自分で考えられることを身につけてほしい」との思いから、一「オリジナルのもので子どもたちの求めに応じ、世の中がどうなっているのかを表現したい」、「子どもに向かって芝居をしているのに、母になったらやめなければならない矛盾を何とかしたい」「より地域に密着した活動をしたい」一こうして活動する中で、地方の創造拠点として 10 年前に「劇団風の子中部」(岐阜市)が誕生したことなどを語られました。

そして話は、今回上演される朗読劇『茶色の朝』の話題となり、元来、幼稚園や小学校を巡回することが中心の劇団にあって、『茶色の朝』は重い作品で難しいと思われたが、劇団をサポートする高校生が、この作品を「詩」=「ことばを伝える」ものとして取り組み、脚本やアドリブにも関わりながら、彼ら中高生だけで公演するに至りました。この中で彼らは、「今、日常で変に思うことも、大人になると変に思わなくなることが怖い」「一つのものに縛られるのは本当に怖い」など、それぞれに何かをつかんでいったとのことでした。

加えて田島さんは、日本の現状も「茶色化」している様相があり、「様々な情報や状況の中で思考停止にならず、自分の頭で考えることの大切さ」を説かれ、先頃の“あいちトリエンナーレ”事件では、数多くの表現者が、「表現の自由」を求めて立ち上がっていることやその行動が平和を守っていることを強調されました。また、身近なところでも、「個人として考えると A であっても、組織の考えとして B と言いつける現実」に、大人たちの自主規制の問題だけでなく、子どもたちにも息苦しさがあることや周りの空気を読んだり、大人の顔色をうかがう様子もあることから、子どもたちへの公演も、「劇を観ながらザワザワして良いから、難しいテーマを緩くせず、問題を自分の頭で考えるもの」にしたいとされました。

田島さんは最後に、こうした状況の中でも、“劇団風の子”は、若い人の係わりが多く、サポーターにも支えられながら、「子どもを守るという立場だけでなく、子どもを尊厳ある一個人として向き合い続けたい」と締められました。また、「子どもの尊厳」を改めて考え取る言葉となりました。

参加者の意見交流では、県内の学校で見られる「黙動掃除」について、その必要性や危険性など、いくつかの意見が出され、「話さないこと」を多面的に捉えることができました。また、あいちトリエンナーレの問題をめぐっては、「表現の自由に政治的判断が介入することにファシズムの進行が表れている」、「ファシズムの進行については、どこまで来ているのかの具体性をもっとあぶり出す必要がある」、「芝居の力として、笑い飛ばして楽しくなる」「以前は、職場での演劇活動があり、その中で、十分な意見の交換があった」「表現の自由に対する権力の圧力は、価値判断能力の育成を妨げるもので、押し付けがあってはならない」等々、活発な発言がありました。

今回は、劇団という表現者からの話題提供で、「表現の自由」を学ぶことができました。日本が閉塞化していると言われる中で、方向を見失わないためには、個人が自分の頭で考え、多様な意見で議論し、その中から光が見えてくるのではないのでしょうか。